慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学原理四分法の弁（上）
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.1 (1918.) ,p.59- 75
JaLC DOI	10.14991/001.19180100-0059
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180100-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

も、之を受理せずといふにありき。されば寶曆・明和兩度の取締により、爾後空米切手は一切市場に其の影を絶つべき筈となれり。

空米切手の取締を嚴重にするは頗る可なれども、之と同時に正米切手の流通を閉塞せば、米價の下落金融の妨害となるや必せり。實際寶曆年間は空米切手市場に横行せるを以て、正米切手を所有せる者は不安を感じて之を賣急ぎたる形迹あり。是に於て幕府は米切手の通用を保證し、切手所有者及び質取主公事出入にて吟味中たりとも、切手は妨無く通用すべし。若し切手所有者又は質取主罪を得て、家財を闕所に處せらるゝも、其の罪妻子に關係なくば、切手は妻子に賜はるべし。吟味中家財に封印を施すことあるも、切手は封印外にして、通用勝手たるべしとせり。此の保證の出でたるは明和二年八月の事なりしが、制定當時正米・帳合米共直ちに一匁の騰貴を來したりといへば、如何に人心に慰安を與へしかを知るべく、其の後安永二年（一七七三）文化十二年（一八一五）安政元年（一八五四）の三回までも、之と同一趣旨又は同一文言を反覆公布したるを以て見れば、此の特典は發布以後幕末に至るまで、百餘年を通じて、米切手に與へられたる保證といふべし。

經濟原理四分法の辨（上）

三邊金藏

經濟原理の內容を生產、交換、分配、消費の四部門に分ちて論究し行く、斯學從來の取扱方に對しては、夙に一部學者間に異議ありて、既に暗默の間に此舊套より蟬脫して、自家獨得の結構を創始せんと、試たる學者すら在りたる有樣なりしが、此傾向は近來に至りて更らに一層其勢を加へ來れるものゝ如くにして、是が先頭に立つ學者中には、公然四分法の非理なる所以を喝破して、明さまに是が廢棄を促すの態度にさへ出づる者あるに至れり。蓋し經濟學の學としての性質に關する學者の見解漸く變化しつゝある其自然の結果に外ならずして、其主張の根柢には、自ら其自身の歷史を有し、其自身の理由を有す、と稱す可きなれば、悉く之に反對せんは、固より一個の無謀にして、吾人の此處に敢てせんとするところにあらず。否啻に此

處に之を敢てせんと欲せざるのみならず、吾人本來の見地よりすれば、親らも亦た同じ思潮に浮び同じ方向に竿さし行かんこそ、寧ろ至當にして軈て又た其素志とする所なれ、と謂ひて可なるが如く信ずる次第なれども、併し四分法に對する見解其ものに至りては、一概に此れが非理を鳴らす人々と軌を同ふして走り離きものあるが如し。因て今暫く身を四分法論者の側に置きて、試みに專ら其意義を勘ふることゝす可し。

二

却説行論の順序上、先づ四分法攻擊論に聽くところなかる可からずとして、最初に福田敎授の言を借用し來ること左の如し。

これ(四分法)は誠に簡單明瞭で覺え宜いので生產、交換、分配、消費として、それで經濟學を盡すことになるのです。（中略）。四項に分け其一々に付いて簡單な原理原則を設けて說きます。それを一度覺えて居れば何にでも當篏まると申すのです。（中略）。此れは甚だ結構でありますけれども實際の事實に當篏めるといふと、必しも當らないことが起るを免れません。（中略）。然るを强ひて四分するのは無理であります。內容の上から言つても生產、交換、分配、消費といふ區別が何處から附くか甚た疑はしいのであります。（中略）。例を擧げて申せば、米は百姓が先づ種籾を蒔きます、それから肥料をやつたり水をやつたり勞力をこれに施してこれが段々生長して稻が出來ます、出來た稻はこれを苅取り、苅取つた稻の穗を取り、そして得た米が玄米で玄米は白米にします、何れも段々價値を增して行くのです。種籾から白米になつたのは價値が大變增した次第です。此白米を需要のある都會の地に持つて來て問屋に卸します、これも亦た價値を增す所以です。田舍にあつて賣れないものが都會に持つて來て賣れるのは價値が增したのです。其から又た小賣屋に行きますと亦價値を增します。小賣屋から買つて我々の臺所に擔ぎ込んだ米は米の儘ではまだ我々の用には足りません。米は淘がなければならぬ炊かなければなりません。炊いた米はこれをお鉢の中に入れなければならぬ、お鉢の中に入れただけではまだ用にならぬ、茶碗に盛らなければならぬ、盛つた飯は箸でこれを運ばなければならぬ、運んだものは更らに嚙まなければならぬ、嚙んだ物を嚥下して、それで始めて我々の身體を

養ふのです。抑も百姓が種籾を蒔いてから我々がそれを嚙む迄悉く價値を增して行く一本道あるのみです。（中略）。故に此意味から申せば我々の爲す所は悉く皆生產であります。百姓も米屋も生產臺所で飯を炊く所の人も生產、これを嚙むのも生產である譯です。

所がそれでは生產、交換、分配、消費と分けたのは何にもならぬことになります。そこで通說では、米屋迄は生產、米屋からこれを買つて來て我々の一家の經濟に入れた時には、生產で無くなつて仕舞つて反對に消費だと申します。（中略）。さうすると生產と言ひ消費と言ひ、何かそこに人爲的に定めた區別の標準がなければなりません。其事自身から見れば區別はなく段々價値を增して居るのですが、生產は此處で止つて、これから先は消費だと申す限界點がなければなりません。所が英吉利流の學者は此問題の性質を究めないで之を曖昧に附して居ります。それが大變に間違を起す基であります。（以下略）。（國民經濟講話）

次ぎに小泉教授の言を借り來れば實に左の如きものあり。

此區分は經濟學に於て從來研究せられ發見せられたる理論又は法則……を了解し易く排列する上に於て相當に功ある事決して否定す可からずと雖、容るし難きは此區分の甚だ非論理專恣にして、理論全體として各經濟單位の私經濟的努力を原動力として複雜多樣なる諸現象を展開し來る國民經濟生活の眞相を闡明すること能はざるの一點なり。經濟原論は其內容を生產論交換論分配論消費論に區分すれども、純然たる技術的過程を除けば生產以外に分配なく、生產分配と相對して別に之と並立すべき交換なる過程存することなし。生產も、所謂分配も其實質は所得贏得なり。而して交換は常に一方に所得贏得他方に於ては所得投用の形態若しくは過程としての外之を了解す可からず。少しく詳細に之を說かんに……今日の經濟社會に於て生產は常に營利の手段として行はれ、又營利の手段としてのみ行はる。獨り企業家が營利の爲めに之を行ふのみならず、所謂生產要素の所有者（地主、資本家及び勞働の所有者たる勞働者）も亦營利の目的を以て之に參加す。（中略）。其成果は即ち賃銀地代利子の形に於ける所得の獲得なり。而して成果は彼等が唯一の目標なり。知る可し生產は常に企業家、勞働者、地主及び資本家凡ての爲めの營利の手段として行はは

れ、而して純然たる技術的過程を除けば、終始交換なる社會的過程―に於て行はるゝ事を。「營利の一手段」。是れ交易經濟社會に於ける生産の位置なり。（中略）。

さて生産論と相對立せしめらるゝは分配論なるが、今日分配論の標題の下に論ぜらるゝ所は所得論にして……利潤、利子、地代、賃銀に關する理論此中に於て研究せらる。……乍併所得論に名くるに分配なる文字を以てするは果して當を得たりや。余は否と答ふるに躊躇せざるものなり。今日所得形成は分配と稱するにふさはしき過程に於て行はるゝ事なし。自然經濟社會又は共産主義の社會に於ては財の「分配」行はるれども、交易經濟社會に於ては分配なきを特色とす。所得は分配せられずして有償的に獲得せらる。分配に非ずして交換なり。企業家は商品の價格と費用との差額を利潤として收む。何の分配か之あらん。……資本家の利子を收むる、地主の地代を收むる、何れか等しからざるものなし。……

さて消費論は何を論すべきか。消費とは財を欲望滿足の用に供する事即ち享樂を意味す。然れども享樂その者は經濟學の取扱ふ可き問題に非ず。……

經濟學は享樂が投費を促がす限りに於てのみ、即ち今日の經濟社會に於ては吾人が或る享樂の爲めに敢て所得の一部を割て投ずる限りに於てのみ之を問題とす。……然れば經濟學が研究す可き消費は財の消費にあらずして云はゞ所得の消費なり。享樂その者に非ずして享樂の爲めに所得の或部分を投ずる事なり。……

今一つの不合理は交換論を生産論分配論と並立せしめ、人をして動もすれば生産、分配の外に之と相對す可き交換なる過程存すかの如く誤解せしむること是なり。今日吾人が交換論に於て學ぶ最重要なるものは市場及價格に關する理論なるが交換、市場價格等を所得の贏得と引離して論ずるは容るす可からず。純然たる對自然の場合を除けば有ゆる經濟生活上の行爲は常に市場に於て交換の形式に於て行はれ、凡てこの所得は價格として形成せらる。勞働は市場に提供せられ、價格として賃銀は支拂はる。資本の場合に於ても然り土地の場合に於ても亦其理は異る事なし。云々。

以上は四分法攻擊論の要旨を福田、小泉兩教授の所說の一端より借り來りたる

ものにして、而して其故らに之を此處に借り來りたるは、四分法攻擊論の論據が兩教授の所說に於て殊に明瞭なるものあるが爲めに外ならざれば、是を知るは即ち一般に四分法攻擊論の理由を知る所以なりとして、更らに他の語を以て之を再說すれば、其意は四分法の非なる所以は其が交易經濟場裡に展開し來る複雜多樣なる諸現象を論理的に闡明するに足らざる點に在りて、而して此點に於ける缺點が直ちに四分法排斥の理由となり得る所以のものは、又た實に經濟原理本來の任務が多姿多態なる經濟現象を因果的に闡明するに存するが爲めに外ならずと謂ふにありと稱し得可し。吾人が常に私かに以て、四分法攻擊論の根據は、之を究極すれば、一般に其因果的見地に歸着するを發見すべしと爲すは、即ち是が爲めなるが、今此見地に立ちて之を見れば如上の攻擊論は誠に其當を得たるものにして、是が矢面に立ち四分法の爲めに陳辯するは、事頗る困難なりと謂はざる可からざるに似たり。蓋し此見地よりして之を看れば、四分法の其目的に適はざるものあるは、正さに論者の言の如くにして其鋭鋒には一點の間隙だに存することなしと謂ひ得可ければなり。而して更らに四分法攻擊論の見地其ものを取りて之を檢するも、吾人は遽かに其價値の甚だ大なるものあるを疑ひ得ざるなり。其故はもと此見地は粗雜纖小なる觀察の上に大膽なる結論を築き、之を原理原則として千態萬容なる經濟現象を律せんとせる、言はゞ行き過ぎたる試みの餘弊に堪ゆる能はず、敢然自ら起ちて吾等は先づ忠實なる事實の蒐集者、細心綿密なる觀察者の態度を以て始め、是等事象間に存する因果關係を闡明するを以て自己の任となす冷靜なる科學者の態度を以て終らざる可からずとなす眞率なる學者の眞率なる主張より生れ出でたるものと解す可きにして、其齎らせる所の效果は、動もすれば事實に遠き一個架空の獨斷論たるに了らんとする危地より經濟原理を拯ひて、次第に精確科學の一たるに近き性質を有せしむるに至りたりと稱し得可ければなり。

然れども之と同時に、吾人は四分法攻擊論者の見地が事の凡てにあらず、從つて其見地より見て以て非なりとなすもの、必しも四分法論者の見地より見て以て是なりとなすものを覆すに足らずと謂はんと欲す。蓋し吾人を以て之を見れば、四分法論者には四分法論者自らの見地ありて、其見地よりすれば四分法は必しも不當不合理なる區分法として目せらる可きものにあらずして、却つて其自らを正當

視せしむるに足る一系の論理的基據を有するものと稱せらる可き性質のものたればなり。

然らば四分法論者自らの見地とは果して如何なる見地にして、四分法を正當視せしむるに足る論理的根據とは果して如何なるものなりや。

三

四分法は一般にジェームス・ミルに創まるとして知らる。然れば四分法論者の見地を正しく知らんと欲せば、又た直ちにジェームス・ミルに溯りて、彼自らの見地を明にし來るを以て最も適當とす可し。然るに彼の見地は、先づ彼自らをして彼が經濟學を如何に解せしやを語らしめ、然る後に彼の子ジョン・スチュアート・ミルをして此種の解釋を批評せしめ、斯くて父子互に切瑳琢磨する其間に就きて、之を看取し來るを以て最も便利とす可し。蓋し斯くするときは、讀者に於ては吾人の駄辨に煩はさるゝことなくして、直ちに大家の門に詣りて其說を質すの利益を享く可く、而して吾人に在りて此點に關する自己の斷案が必しも何等の根據なき一家言にあらざるを最も簡便に立證し得るの利益を收め得可ければなり。

然り、然らばジェームス・ミルは經濟學を如何に解せしや。彼の著 Elements of Political Economy の開卷第一頁は左の如く之を語る。

Political Economy is to the State, what domestic economy is to the family.

The family consumes, and in order to consume, it must obtain supply.

Domestic economy has, therefore, two grand objects: the consumption and supply of the family. The consumption being a quantity always indefinite, for there is no end to desire of enjoyment, the great concern is to increase the supply.

The same is the case with Political Economy. It also has two grand objects, the consumption of the community, and that supply upon which the consumption depends. × × × Had all things desired for consumption been found without the intervention of human labour, the Science of Political Economy would not have existed. No science is implied in putting forth the hand, and using. When labour, however, is to be employed, and the objects of desire can be multiplied only by a preconcerted plan of operations, it becomes an object of importance to ascertain by what means they may be produced with greatest ease and in greatest abundance; and upon these disco-

veries, when made, to frame a system of rules skillfully adopted to the end.

（經濟の國家に於けるは、猶ほ家政の一家に於けるが如し。

一家は消費す。而して消費せんが爲めには、其は供給を得ざる可からず。

故に家政は二大對象を有す。一家の消費と供給とは即ち是なり。（然かも）消費は、享樂の願望に終止する所なきの故に因り、常に一個無限の量たれば、大ひに重要なるは供給を增加するにあり。

事の經濟に關する亦た然り。經濟も亦た二個の大なる對象を有す。社會の消費と、其消費の依據する彼の供給とは即ち是なり。……消費の爲めに願望せらるゝ凡ての物が、人間勞力の仲介を俟たずして供せられたりしならんには、經濟學は成立せざりしなる可し。如何なる科學も、享けんが爲めに手を差出すことや、使用することの中には包含せられざるなり。然れども勞力の使用せられざる可からざる時、及び願望の對象が豫定せられたる作業計畫に依りてのみ增加せられ得るものなる時には、其が如何なる手段を以てすれば、最大の安易を以て、而かも最大豐富に生產せられ得可きかを究め、而して一度究められたる時は、此發見に基きて巧みに目的に適合せる一系の規則を編制すること、一個重要なる事象たるに至る）。

而して此種見解に對するジョン・スチユアート・ミルの批評は實に左の如し

The definition most generally received among instructed persons, and laid down in the commencement of most of the professed treatieses on the subject, is to the following effect:——That Political Economy informs us of the laws which regulate the production, distribution, and consumption of wealth. To this definition is frequently appended a familiar illustration. *Political Economy, it is said, is to the state, what domestic economy is to the family.*

This definition is free from the fault which we pointed out in the former one. It distinctly takes notice that Political Economy is a science and not an art; × × × × × ×

But though the definition is, with regard to this particular point, unobjectionable, *so much can scarcely be said for the accompanying illustration*; which rather sends back the mind to the current loose notion of Political Economy already disposed of. Political Economy is really and is stated in the definition to be, a science; but domestic economy, so far as it is capable of being reduced

to principles, is an art. It consists of rules, or maxims of prudence, for keeping the family regularly supplied with what its wants require, and securing, with any given amount of means, the greatest possible quantity of physical comfort and enjoyment. Undoubtedly the beneficial *result*, the great practical *application* of Political Economy, would be to accomplish for a nation something like what the most perfect domestic economy accomplishes for a single houshold; but supposing this purpose realised, there would be the same difference between the rules by which it might be effected, and Political Economy, which there is between the art of gunnery and the theory of projectiles, or between the rules of mathematical land-surveying and the science of trigonometry; etc.——Definition and Method of Poltical Economy P. 124—126

（教養ある人士間に最も普く認容せられ且つ此主題を取扱ふと公言する論文の大多數の破題に置かるゝ定義は次の如き趣旨のものなり、—— 經濟學は富の生產分配及消費を調整する諸法則を吾人に教ゆるものなり。此定義には屢日常周知の例解添加せらる。曰く經濟の國家に於けるは家政の一家に於けるが如しと。

此定義は吾人が前きのものに於て指摘せる缺點より免かる。蓋し其は明かに經濟學は學にして術にあらざるに注意すればなり。……然れども此定義は此特殊の點に關してこそ之を非難し難けれ、其之に伴ふ例解に對しては然か言はれ得るの餘地殆んどあることなきものたるなり。蓋し此例解は既に論破し了れる世間普通の茫漠たる經濟學概念に注意を回送すればなり。經濟學は誠に一個の學にして而して學たること定義中に說述せらる。然れども家政學は、其が數個の原理原則に還元せられ得る限りは、一個の術たるなり。家政學は常に規則正しく一家に供するに其慾望の需むるものを以てし、且つ一定量の手段を以て肉體的快適と慰樂との可及的最大量を確保せんが爲めの規則、若くは深慮の格律より成るものなり。經濟學の有益なる結果、廣大なる實際の應用は、最も完全なる家政學が一個の家庭の爲めに成就すると等しきものを、一國民の爲めに成就するにあるならんは疑を容れざる所なり。然れども假りに此目的實現せられたりとするも、其が賴りて成就せらる可き規則と經濟學との間には、砲術と彈道學理論との間、若くは數理的測量術と三角法との間に存する相違と同じ相違の存するものあるを見んなり）。

即ちジョン・スチユアート・ミルは父なるジユームス・ミルの所說を評して、經濟學若し誠に大人の言の如くなりとすれば、其は學にあらずして術たるに外ならずと云ふ者にして、而して其所謂學と術との別に就ては Science is a collection of truths; art a body of rules, or directions for conduct. The langnage of science is, This is, or, This is not; This does, or does not, happen. The language of art is, Do this: Avoid that. Science takes cognizance of a phenomenon, and endeavours to discover its law; art proposes to itself an end, and looks for means to effect it.——Definition and method of Political Economy. P. 124. (科學は眞理の集合にして術は行爲の規則若くは指令の一體なり。科學の言語は、此は斯くあり、又は、此は斯くあらず。此は斯く生起す、又は、此は斯く生起せず、と云ふにあり。

術の言語は、斯く爲せ、其を避けよ、と云ふにあり。科學は現象を認識して其法則を發見せんと努む。術は自ら一個の目的を目指して之を成就す可き手段を探求す。）と云ふが故に、結局彼の意は、ジユームス・ミルは諸種の經濟現象に就き其間に存する因果の理法を闡明し來ること其自體を以て、直ちに經濟學研究の目的とせず、當時の他の學者と等しく如何にして國富を增加すべきやと云ふ問題を中心として斯學の研究に從事せる者なり、と言ふにありと推し得可くして吾人の贊成を吝まざるところなり。然れども彼の如く一を學と呼び他を術と稱するは、假令彼の解意を以てするも、獨ほ語弊の存するものありて、ジユームス・ミルの見地を正しく世人に傳ふる上に一個の暗影を投ずるなきを保す可からざるなり。故に吾人は左の如く是を換言して其憂を去らんと欲す。曰く、ジユームス・ミルは單に經濟現象間に存する因果の理法を闡明し來るのみを以て足れりとなす所謂因果的見地の上に立つを以て自ら滿足せず、更らに向上の一路を辿りて、其斯く闡明し得たるところを彼の中心問題に關係せしめて、之を考察するの態度に出でたるものと見做さる可きにして、他の語を以て之を言へば目的觀的見地に立つに至りたるものと稱せらる可きなりと。即ち軈て吾人が先きに稱して四分法論者には、四分法論者自らの見地ありとなせる所以の眞意にして、今自ら之を解說したるものなり。